

武者小路實篤選集

第十一卷

武者小路実篤選集 第十一卷

青銅社版

武者小路実篤選集

第 11 卷

昭和40年 4 月30日 初版発行

定価 六八〇円

著 者 武者 小路 実 篤

発行者 真 鍋 謙 二

本文印刷 三 恭 印刷株式会社

口絵印刷 京橋原色版印刷所

製 本 石 津 製 本 所

東京都新宿区納戸町五番地

発行所 図書出版 株式会社 青 銅 社

電話 二六〇局 八七六五番
振替 東京 三四、八九二番

printed in Japan ©

序

○ 他人と自分は没交渉ではない

他人の内に自分が居

自分の内に他人が居る。

○ 自分のかいでは表現出来ない人間の切断面が、他人のことをかくことで表現出来ることがある。

○ 文学には人生を公平に全部的にはかけない。ある作品はある一面を殊に強調することで読者の心の内に眠らせている感情を目ざまし、それを生き生きさせることがある。読者はその時新鮮な感じを受ける。

○ 図抜けた人をかくことで、作者は自分の内、また読者の内の感情を目ざまし、生き生きさせる事が出来る面がある。

○ 伝記小説の面白さの一つは他の人をかくことでは表現出来ないあるものを表現出来るところにある。

○ 甲をかけば甲でなければ持たない特色と経験と生命がある。

○

僕は伝記をかく時新しい見方をしようとは思わない。なるべく正体を本当に見たいと思う。しかし見得るのは自分の鏡にうつる面だけである。それはまた自分が相手の鏡にうつる面でもある。

だから英雄を知るのは英雄と言うことになる。

作者の内に英雄も聖人もいなければ、英雄や、聖人はかけないわけだ。

仰いでかく伝記もあり得る。しかし文学になり得るには彼の実感が我の実感にならなければならない。

人間をかくと共に運命をかく、運命の過去、現在、未来の關係は伝記小説で正体を見せやすい、材料がつくりものでないからだ。

その時代もかけたらかく方がいいが、しかし書けもしないのに、嘘をかい得意になるわけにはゆかない。僕は伝記小説をかく時、その時代を無視はしないつもりだが、それ以上自分の生命と交渉する生命をかきたい。

材料は父、

作者は母、

作品は子、

作者は材料になるべく似た子が生みたいが、しかし生まれてくる子はどっちにより多く似るか、作者は知らない。

「伝記小説に就て」より

武者小路実篤選集・第十一卷

目次

耶蘇 7

二宮尊徳 141

一休 273

良寛 405

解題……………中川孝

題字・武者小路実篤

耶
蘇

序

毎日耶蘇のことを思わないことはない。自分は耶蘇教では満足出来ないもの、耶蘇の言われた通りに生活することを最上のものと思っていないものと、思っていた。しかしこの頃になってやっと耶蘇の偉さがわかったように思う。耶蘇の言われたような生活を送ることが人間の理想的生活であるということを感じて来た。人間はその通りの生活が出来ないでもそれは仕方がないが、それを自分で恥じなければならぬことを知った。その通りの生活が出来るまでは自分の弱き人間であることを知った。耶蘇の神は自分の神だ、人間の神だということを知った。耶蘇の言う通り生きるのが最も神に愛される道だということを知った。それは実に神と共にいることであり、巖の上に家を築くことである。

しかし他人が耶蘇の言う通り生きないでもそれは同情すべきことであって憎むべきことではない。そのことは許すべきことで責むべきことではない、しかし同時に賞むべきことではない、「無理はない」と言うべきことで、感心すべきことではない。まして信じるべきことではない。しかし自分が耶蘇の言う通り生きられないことは恥ずべきことである。それで臆病になるべきことではないが、厚顔しくなるべきことではない。その時柄が来てもそれは神を恨むべきことではなく、自分の足りないことをはっきりさせることとして謹むことを知るべきである。

耶穌は神の一人子^{ひとりご}ではないが、最も愛された子だ。少なくとも最も神の御心を知り、生かし、また生きた人だ。神の御心以外にはみ出ることの最も少ない人だ。まるでみ出なかったと言いたいくらいだ。

しかし自分は耶穌を信じるよりも耶穌の神を信じるものだ。自分はここに耶穌のことをかくのは実にその神のことをかきたいからだ。自分の力は足りない。神よ、助け給え。

自分はいつのまにかあなたを信じる者になった。

一

福音書にかかれた耶穌の系図はヨゼフの系図で、ヨゼフの血が耶穌にかかわりがないとすれば、それが一々くわしくかかれていますのは自分には不思議に思う。ともかくそういう血統のヨゼフを養父としてマリヤを母として耶穌は三十歳までは無名の人として生きていた。それまでのことは伝説として見れば面白い話も、美しい話もある。十二歳のとき、耶穌が既に人並みはずれた聡明さを持っていたことがエルサレムの寺院で僧侶と話をしていた逸話（ルカ二ノ四〇―五二）で伝えられているが、その他はまるで伝えられていない。耶穌も自分の若い時の話をされなかったと見える。自分はそこにいろいろの想像をいれることが出来ると思うが、その事実は想像を超えていることが多いと思うから、そこには沈黙の幕をおろして、その前に跪きたい。

ともかく耶穌は三十ぐらいまでは神の子となれなかったことは事実だ。耶穌はだんだん神の子になりつつあったろう。それが三十ぐらいになって一時に輝き出した。そしてそれは洗礼ヨハネの力があることは確かだ。

耶穌は旧約聖書をよくよんでいたと思う。そして自分を救世主ではないかとひそかに思っていたであろう。そこへヨハネの声はひびいた。

「天国は近づけり、悔い改めよ。」

「我は水を以てバプテスマをなんじら爾曹に施えり、我後に來たる者は我に優りて能力あり、我はその履くつのひもを解くにも足らず、彼は聖靈と火を以てバプテスマを爾曹に施わん。」

耶蘇はそれ等の言葉を聞いて「後に來たる者」は自分であるとひそかに思ったであらう。

二

耶蘇はヨハネの洗礼をうけた。それはたしかに心の上にもうけた。耶蘇がヨハネから洗礼を受けたとき、ヨハネがすぐこの人が救世主だと認めたということは自分は事実としては信じられない。その後ヨハネは弟子を出して耶蘇を本当の救世主かどうかを聞かしている。しかし自分にとってそんなことはどうでもいい。耶蘇がヨハネによって自覚をはっきりさせたことはたしかだ。その時のことを馬太伝には「イエス、バプテスマを受けて直ちに水より上がり給いし時、視よ天ひらけ、神の御靈の、館のごとく降りて己が上に來るを見給う、また天より声あり曰く『これ我が愛しむ子。わが悦ぶものなり』」とかかれています。内面的に言えば、このくらしいの表現がしたくなるのは当然と思う。美しい言葉である。荒野の誘惑は比喩であるか、本当に耶蘇が幻影を見たのか、それとも知らない。ともかく耶蘇の精神上に起こった苦悶を示していることは確かと思う。耶蘇はそこではまだ迷っている。迷っているが故に悪魔に突っ込まれる。耶蘇が自分に奇蹟を行なう力のないことにたいする疑問が出てくる。耶蘇は世界中の人を餓えさしたくなかった。しかしその力が自分ないことを感じないわけにはゆかなかつた。自分自身さえ餓えた。彼は四十日四十夜食うことはしなかった。そして餓えた。そこに悪魔はつけこんだ。「お前がもし神の子ならばこの石に命じてパンと為せよ。」

耶蘇にはそれは出来ないことだった。彼は

「人はパンのみで生きる者ではない、ただ神の凡ての言葉による」と答えた。

自分は敢て言う。この言葉はまだ權威の十分にはない言葉だ。「人はパンのみにて生きる者にあらず」これは本当だ。「ただ神の凡ての言葉による」この「ただ」がいけない。前にある「のみ」とこの「ただ」とは言葉が合わない。それから「神の凡ての言葉による」の「言葉」という言葉が少しあいまいだ。その後の耶蘇はそんなあいまいなことは言わない。しかしこれは福音書をかいた人の罪かも知れない。

左近氏の訳によると、

「人は、パンのみに基づきて活く可からず。されど神の口を通じて進み出ずるあらゆる言に基づきて」

これだと少しはいいいようでもあるが、しかしどこかあいまいだ。權威が少し足りない。びたりと来ない。そこには随分大きな本当のことがかくれてはいるが、まだそれが顕われきっていないように思える。

次にくるのは自己の生命問題だ。どんなに真理のために迫害されても死なない自分でありたいと思う弱点を惡魔は衝いて来た。

耶蘇は宮の高樓に立った。そこで惡魔は言う。

「お前がもし神の子だったら自分の身を下へ投げよ、それは『なんじがために神その使者に命ぜん、彼等手にて支え爾が足の下に触れざるようすべし』と本にかいてあるから」

耶蘇はそれに、

「主たる汝の神を試みるべからず」と言った。

その答えは正しい。しかし言い訳にとれる。そこにまだ何となく權威はない。だから惡魔を逐い去ることは出

来ない。悪魔はなお彼を山の上へつれてゆく。

しかし自分はその前に耶蘇が水上を歩いた時の話をここで思い起こしたい。耶蘇は水上を歩いたか歩かないかはわからない。だがそこでは神を試みるために水上を歩いたのではない。そしてそれを少し疑ったペテロが、

「主よ、もしあなたがただったら私に命じ水をふんであなたの所に行かして下さい」と言った時、耶蘇は来いと言った。そしてペテロが浪を見て恐れをいだと共におぼれかけ救いを求めた時に、

「信仰うすき者よ、なぜ疑うのだ。」

と言っている。この言葉には權威がある。

自分はこの事実を信じきろうとは思わないが、耶蘇の信仰の次第に確かになったことを語る話として面白く思う。耶蘇はここではもう悪魔の誘惑なんぞまるで問題になっていない。高樓からも平気でとびおり、とびおりられないペテロに「汝、信仰うすき者よ」と言い兼ねなく見える。「神を試みるべからず」という言葉は本当の言葉ではあるが、まだ神を試みようとする意志のはのめきを見る。

第三の誘惑は、地上の権利を獲得して、この世を権力をもって改造しようとする誘惑だ。それを虚栄を得ようとする誘惑のように福音書にかかれているのは少し解釈ちがいのと思う。

「お前がもし平伏して私を拝んだら、私はお前に、凡てこれ等のものを与える。」

と悪魔は言っていることになっているが、これは悪魔としては少しまずすぎる。

「お前がもし神の子ならば、凡てこれ等のものはお前の意のままになるはずだ。」

と言う方がなお恐ろしい誘惑になる。しかしこの愚かな悪魔の誘惑を、さすがに耶蘇は權威をもってはねのけた。

「サタンよ、退け、主たる汝の神を拝し、唯だこれにのみ事うべし。」

この言葉、この本心の前には悪魔は去らないわけにはゆかない。

「主たる汝の神を拝し、唯だこれにのみ事うべし。」

それが神を知るものにとってはすべてである。耶蘇は遂に神の子になった。

この時ヨハネがとらわれた。この事実は耶蘇をうごかさないわけにはゆかない。彼の決心はかたまった。

三

洗礼のヨハネも大した人である。彼は身に駱駝らくだの毛衣をき腰に皮の帯をつかね、蝗虫いなごと野蜜を食い、ヨルダン川で人々にバプテスマをささづけていた。彼を殺すことをヘロデさえ恐れた。彼の名は四方にひびき、四方から悔い改めるために彼のもとに集まった。

耶蘇は彼についてこう言った。

「お前等は何を見ようとして野に出たか。風に動かさるる葦をか。それならばお前等は何を見ようとして出たか、予言者をか。そうだ、私はお前等に云う、彼は予言者よりも優れた者だ。夫れなんじに先だちて道を備える我が使者つかいを我なんじの前に遣らんと録しるされてあるのは即ちこの人だ。更にお前達に云うが婦の生んだ者の中まだバプテスマのヨハネより大なるものは起おここらなかつた、しかし天国の最小いとしき者も彼よりは大である。律法りふと予言者はヨハネまでだ、そののち神の国は宣伝のべつたえられる。皆つとめてこれに入ろうとするのだ。」

この言葉でヨハネと耶蘇の関係ははっきりするであらう。

ヨハネは道をそなえたものである。その役目をすましてとらわれの身になったのである。後に来る者はあらわ